

<総括>

出題数	現代文 2題・古文 1題	試験時間	90分
-----	--------------	------	-----

- ・教養に偏した「伝統主義」を排し、自由な態度で新しい芸術の創造を説く、芸術家の随筆からの出題。
- ・本文の分量は昨年度よりも1頁ほど増加している。すべて記述説明であり、設問数も五問と変化はみられない。ただし、解答欄の行数の合計は昨年度(13行)に比べ15行と2行増加した。
- ・本文の分量の増加、記述分量の増加はみられるが、総合的にみて、全体の難易度は、ほぼ例年並。
- ・昨年度同様、本文は文理共通だが、理系では文系で出題された問四がなく、全四問の出題となっている。

<本文分析>

大問番号	□
出典 (作者)	岡本太郎 『日本の伝統』(昭和三十一年)
頻出度合 ・的中等	なし
分量 前年比較	分量(減少・やや減少・変化なし・ <b>やや増加</b> ・増加)
難易 前年比較	難易(易化・やや易化・ <b>変化なし</b> ・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)
□	随筆	問一	記述式	標準	傍線部の内容を説明する問題。(解答欄3行) 「どっちが……分からなくなってきました」という表現に適合する説明となるよう、工夫が求められる。
		問二	記述式	標準	傍線部の内容を説明する問題。(解答欄4行) 「自分が法隆寺に」という修辭的な表現が指す内容を直後の文脈から正確に組み立てて説明する。
		問三	記述式	標準	傍線部の理由を説明する問題。(解答欄3行) 筆者が警戒していたことを踏まえて、傍線部の「アブナイ」という表現が示す内容を具体的に説明する。
		問四	記述式	標準	傍線部に関わらせた趣旨の説明の問題。(解答欄5行) 「美に絶望し退屈している者」の含意を文脈から丁寧に説明しつつ、「ほんとうの芸術家」という語に込められた本文全体の趣旨を踏まえた説明を組み立てるよう、工夫をこらす必要がある。

※難易度は5段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- ・評論であれ随筆であれ、文章の主題や筆者の主張を全体からの確に把握するとともに、個々の文脈を丁寧にたどって正確に押さえる読解力が不可欠である。
- ・設問の意図を踏まえ、理解した内容を簡潔かつ的確に表現してみる訓練が欠かせない。
- ・今年度も、漢字問題は出題されなかったが、読解力養成の前提として、その知識の蓄積を怠らないこと。

<総括>

出題数	現代文 2題・古文 1題	試験時間	90分
-----	--------------	------	-----

- ・日本語を学ぶ外国人学生の文章をもとに、一筋縄にはいかない文章表現の妙について綴られた小説からの出題。
- ・問題文は比較的読みやすいが、解答に必要な内容を過不足なく読み取り、それらを解答欄に収まるようにまとめるのは容易ではない。

<本文分析>

大問番号	□
出典 (作者)	多和田葉子 「雲をつかむ話」
頻出度合 ・的中等	なし
分量 前年比較	分量 (減少・やや減少・ <b>変化なし</b> ・やや増加・増加)
難易 前年比較	難易 (易化・やや易化・ <b>変化なし</b> ・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
□	小説	問一	記述式	標準	傍線部の内容説明問題。(解答欄3行) ※前後の文脈を踏まえながら、傍線部の比喩的な表現にも注意して説明する。
		問二	記述式	標準	傍線部の理由説明問題。(解答欄3行) ※傍線部を含む段落の内容を中心に説明する。
		問三	記述式	やや難	傍線部の内容説明問題。(解答欄4行) ※本文全体を視野に入れつつ、傍線部を含む段落と最終段落を中心にまとめる。 ※答案のまとめ方に工夫がいる。

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- ・□は理系の単独の出題であるが、理系の受験生にとって問題の水準は決して平易とはいえない。文理共通問題□のレベルにも対応できるように学習しておきたい。
- ・文章のジャンルを問わず、単に字面を追うのではなく、その主題を本文全体からの確に把握するとともに文脈を精確に理解する読解力と、その内容を適切に説明する記述力が不可欠である。

<総括>

出題数	現代文 2題・古文 1題	試験時間	90分
<ul style="list-style-type: none"> <li>鎌倉時代の私家集からの出題であった。私家集の出題ははじめてである。</li> <li>昨年と同様、解答数は三つであった。</li> <li>設問構成は昨年とちがい現代語訳二つと、説明問題一つであった。</li> <li>昨年は本文に和歌がなかったが、本文に二首、注に一首、設問に一首あり、設問にもかかわった。</li> </ul>			

<本文分析>

大問番号	目
出典 (作者)	『建礼門院右京大夫集』 (建礼門院右京大夫)
頻出度合 ・的中等	稀
分量 前年比較	分量 (減少)・やや減少・変化なし・やや増加・増加 約360字 (前年約460字)
難易 前年比較	難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
目	私家集	問一	記述式	難	引き歌を踏まえた作者の心情説明。引き歌をリード文を踏まえて解釈するのが難。(解答欄3行)
		問二	記述式	難	「適宜ことばを補いつつ」という条件付きの現代語訳問題。「心には近きも」の具体的な訳、「返す返す」「むつかし」の訳出がポイント。「心には近きも」の具体的な訳は難。「むつかし」のこの文脈にあう訳出は難。(解答欄2行)
		問三	記述式	難	『さこそ』の指示内容を明らかにしつつ」という条件付きの現代語訳問題。「人」の具体化、重要古語「げに」の訳出、引き歌と文脈を踏まえた「さ」の訳出などがポイント。全体が難。(解答欄2行)

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

<ul style="list-style-type: none"> <li>今年の出題を考えると、私家集の詞書や日記などの文章に慣れておく必要がある。</li> <li>例年の出題を見ると中世・近世の随筆・歌論からの出題が多いので、何かについて論じる文章にも慣れておく必要がある。</li> <li>時には平安時代の作品も出題されているので、多様な時代・ジャンルの文章に慣れておこう。</li> <li>主語、目的語、指示内容などを考えながら、文章全体の内容を正確に理解する練習を平素からおこなっておくこと。それによって説明問題にも対応できるのである。</li> <li>本文全体を現代語訳できるかどうか京大理系古文の根本である。現代語訳をする練習がいちばんに望まれる。</li> <li>今年は和歌についての問題が出題された。修辞、現代語訳、趣旨の説明など、和歌の対策は必ずしておきたい。</li> </ul>
---